**山内逸三（1908–1992）のモザイクタイル**

これらは、日本における釉薬付き磁器モザイクタイルの発明者といわれる陶磁器製造者である山内逸三が制作したモザイクタイルの試作品である。

笠原に生まれた山内は、15歳で京都に出て、京都市立陶磁器講習所で陶磁と釉薬を学んだ。1929年に帰郷し、タイル工場を設立した。当初は、大型の装飾タイルを中心に作っていた。しかし、このような複雑で立体的な作品を作るのは難しく、時間もかかった。慎重に成形しなければならず、焼成中に割れてしまうこともあったため、山内は、もっと小さくてシンプルなタイルを作れば、均一なロットで作りやすく、破損などの問題も起きにくいのではないかと考えた。そして、1935年に自身のモザイクタイルの量産方法を完成させた。

モザイクタイルは、特に第二次世界大戦後の復興期によく売れた。山内の成功を見て、笠原の他の製陶者もモザイクタイルの生産に乗り出した。製陶者は企業秘密を守るのが普通だが、山内が自由に情報を共有した結果、生産方法に革命が起こり、笠原は戦後のタイル生産の中心地となった。

左側の大きなプロトタイプは、「スリップ」と呼ばれる液状の粘土を型に詰めて作った炻器である。右側の小さな方は、粉末状の粘土に珪酸や長石などの結合剤を混ぜて型に押し込んだ乾式磁器である。